

稲わらすき込み及び籾殻施用による土づくり

稲わらを秋にすき込むと、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できます。また、籾殻はケイ酸成分や有機物を多く含み、分解に時間がかかりますが、長期的な資源供給を担います。水田から収奪した資材を水田に還元することで、循環型農業を推進しましょう。

●稲わらの秋すき込み

(1) すき込み時期

稲わらの分解は、土壤微生物が活動する地温 15℃以上になります。できるだけ収穫後早くすき込むことで、堆肥と同じ程度に分解されます。春すき込みは、ワキの原因となるメタンガスの発生が最も多くなります。遅くとも 10 月中旬までにすき込んでください。

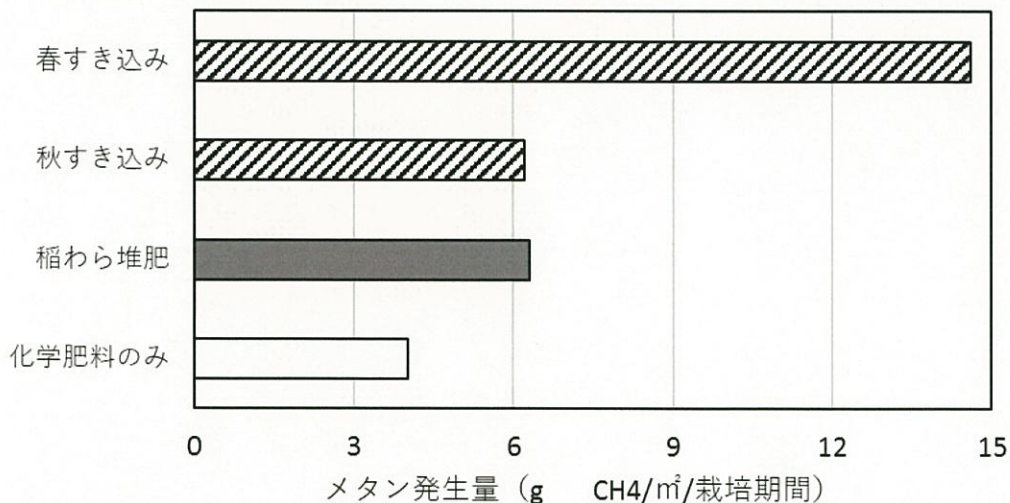


図 水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響（新潟農試）

(2) 耕うんの深さ

すき込み時の耕深は、作業能率や土壤微生物への酸素供給、春作業への影響を考慮し、5～10 cmの浅うちが適しています。

(3) すき込み後の管理

冬期に湛水しやすい水田では、排水溝を作り、表面水を排水してください。

すき込み時期が遅く、翌年の田植え後にワキの発生がみられる場合は、用水の更新や夜間落水を行い、土壤への酸素供給を促してください。

● 籾殻の施用

(1) 施用量・施用方法

10 アールの水田から 120 kg 程度の籾殻が得られます。施用するめやすとして、約 2 倍の 10 アール 250 kg までは水稻への影響がないことが報告されています。

できるだけ、施用ムラを少なくするためには籾殻専用の散布機器を用いることをおすすめします。



(2) 病害や雑草が多発生した水田からの籾殻は施用しない

ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したり、クサネム等の雑草が多発生した圃場の籾殻は翌年の伝染源になる可能性があるため、施用を控えてください。

● 稲わらの分解促進資材

稲わらのすき込み時期が遅れたり、湿田で分解が進まない圃場では、分解促進資材の施用を推奨します。

詳しい使い方は 8 月号に掲載されています。



(担い手・営農支援部 担い手・営農支援課)